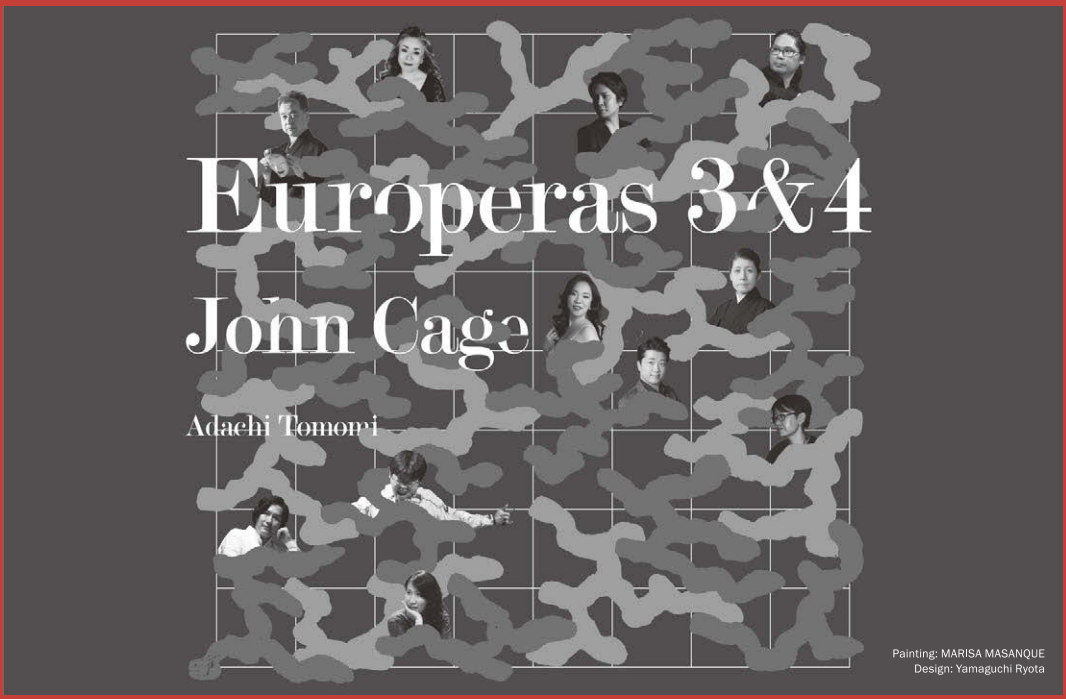

ジョン・ケージ

『ユーロペラ3&4』（日本初演）

John Cage

Europeras 3 & 4 (Japan Premiere)

2022.8.13 Sat - 14 Sun

愛知県芸術劇場 小ホール

Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater

STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

『ユーロペラ３＆４』に寄せて

足立智美（演出）

「ユーロペラ」はケージの最晩年の作品であり、全部で五作あるが１と２、３と４は常にペアで上演されることになっているので、実質三作といえる。

ジョン・ケージという作曲家についてはあらためていうこともないだろう。名実ともに20世紀音楽の、いや芸術全般に最も大きな影響を与えた一人であり、ヨーロッパ中心になりたつ芸術史にアメリカから大きな風穴をあけた。東洋哲学、ことに禅の影響を公言し、西洋のみならず東洋においてですら東洋哲学への関心を喚起した。

ケージにとって19世紀ヨーロッパという時代、場所に強く結びついたオペラという形式は最も遠いものだったろう。なぜオペラを書いたのか、といえば委嘱されたから、以外に答えはないだろうが、Europeraというタイトルからはいくつかの事柄が読み取れる。Euroはいうまでもなくヨーロッパを意味するが、同時に発音としては Your Operaつまり「あなたのオペラ」を連想させる。ここにはヨーロッパとアメリカの距離が反映されていると同時に、それが「あなたのもの」へと転換する可能性が示されている。

ケージの作品では珍しくないが、ここには新しく書かれた音符はひとつもない。歌手は自分で選んだ既存のアリアを歌い、ピアノはオペラの断片を弾く。公演ごとに変わるタイムテーブルが用意され、同じ上演は起きないようになっている。1&2でのオーケストラは蓄音器のオーケストラに置き換えられる。再生・受容メディアを楽器として使うのはケージならでは（ターンテーブルを最初に演奏に使ったのはケージである）だが、わざわざ蓄音器という古いメディアが使われていることに留意しよう。ここではメディア自体の古さが作品の重要な要素になっている。最新のテクノロジーを採用することの多いケージにとってこのようなメディア考古学アプローチは珍しい。新しいテクノロジーといえば、この作品のために作られたソフトウェアeuroperaも特筆すべきだろう。照明パートは、この乱数プログラムに会場ごとに変わる初期条件を入力することで歌手の動きとは全く関係のない独立したパートが新たに生成される。音響パートではアリアの録音を膨大に重ね合わせたTruckeraというテープ音楽がこのプログラムにしたがって再生される。蓄音器奏者には300枚に及ぶ78回転レコードをかけるタイミングがプログラムによって生成される。オペラの語源"Opus"の複数形に立ち返ってすべてのパートが対等なだけでなく、すべての上演は異なる上演の可能性を含むことになる。

３と４は概ね似た方法が適用されているが、ケージの作品にしては大変めずらしいことに静と動の対比を形作る。そのことを除けば、ここに通常のオペラにおける「演出」が入り込む余地は大変少ないが、今回の上演の最大の特徴はオペラ歌手パートの一部に能楽師を起用したことにある。ユーロペラには明らかに能楽への参照が見て取られ、ケージはユーロペラに続く劇場作品として能楽師による実験的な作品を構想していた。

ケージの実現できなかった夢を垣間見ようとすると同時に、「ユーロペラ」がヨーロッパのオペラへのアメリカからの回答であったように、この上演はアメリカのオペラに対する東洋からの返答であるように考えた。ケージは確かに東洋思想から創造したが、そこに自己主張することのなく沈黙するばかりの東洋への勝手な期待の押し付けという側面はなかったか。

異なる声と響きが、お互いに自らを損なうことなく共存する。そんな一種のユートピアがしかし、観念の上で空間と時間が前提されるわけではなく、上演されるまさにそのことによって新たに生み出される。東洋や西洋といった何度も繰り返されてきた、しかし現実に機能する枠組みと対立をこのような上演で解体することは可能だろうか。

曲目 Program

ユーロペラ３（70分）
Europera 3

出演：全員

── 休憩 ──

ユーロペラ４（30分）
Europera 4

出演：歌手はダブルキャスト
【13日】佐野登、駒田敏章
【14日】松田若子、西本真子

上演時間 約120分（休憩含む）

演出 Director

© Guillaume Kerhervé//Maison de la Poésie de Nantes

足立智美
Adachi Tomomi

パフォーマー、作曲家、音響詩人、楽器製作者、視覚芸術家。その多彩なスタイルで知られ、自身の声とエレクトロニクスによる作品、音響詩、即興演奏、現代音楽作品の上演から、サイト・スペシフィックな作曲、器楽作品、技術を持たない人々のための合唱曲などを、テート・モダン（ロンドン、英国）、ハンブルガー・バーンホフ美術館（ベルリン、ドイツ）、ポンピドゥー・センター（パリ、フランス）、ベルリン・ポエジー・フェスティバル（ドイツ）など世界各地で発表している。その作品には自作のインターフェイスから、人工知能、脳波、人工衛星、ツイッター、骨折、超常現象までもが用いられる。

出演 Performers

佐野登（能楽師シテ方）
Sano Noboru (Noh Actor)

宝生流能楽師シテ方。重要無形文化財総合指定(能楽)保持者。東京藝術大学卒。宝生流18代宗家宝生英雄に師事。全国各地で演能活動、謡曲・仕舞を指導するほか、「生きる力」をテーマに次世代育成のための日本の伝統・文化理解、体験型プログラムや授業を実施。教員・教育関係者への講演も多数行う。海外公演への参加や中島みゆき『夜会』出演をはじめ、他ジャンルのアーティストとの交流も多く、現代に活きる能楽を目指し、積極的に活動している。

松田若子（能楽師シテ方）
Matsuda Wakako (Noh Actor)

宝生流能楽師シテ方。金沢市生まれ。幼少より能楽師の祖父と父に指導を受ける。東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻卒、同大学院修了。宝生宗家及び佐野登に師事。金沢を拠点に金沢能楽会、海外友好公演、他分野とのコラボレーションに出演。これまでに能『乱』『石橋』を披く。文化庁平成４年度 芸術インターンシップ研修員。平成26年度 重要無形文化財総合指定認定。令和２年度AFF認定事業 女性能楽師による能楽公演『第四回 能における節供と花々』主催。ほか、女性が能の道に挑むをテーマにした講演活動も行う。令和元年度金沢市文化活動賞受賞。福井大学非常勤講師。沢鏡会主宰。

西本真子（ソプラノ）
Nishimoto Mako (Soprano)

静岡県出身。武蔵野音楽大学及び同大学大学院を首席で修了。2012年フィリピン国立劇場および2013年シンガポールリリックオペラの『蝶々夫人』タイトルロールで国際デビュー。『椿姫』ヴィオレッタ、『ラ・ボエーム』ミミ、『トスカ』タイトルロール、『仮面舞踏会』アメーリア、『マクベス』マクベス夫人、『カルメン』ミカエラ、『マハゴニー市の興亡』ジェニーなど幅広い役柄を演じる。2018年藤原歌劇団に『ナヴァラの娘』（日本初演）アニタ役でデビュー後、2021年『フィガロの結婚』伯爵夫人、2022年『イル・トロヴァトーレ』レオノーラ役と立て続けにメインキャストを務める。『4音オペラ』でサントリー芸術財団佐治敬三賞受賞。藤原歌劇団団員。日本オペラ協会会員。

福原寿美枝（メゾ・ソプラノ）
Fukuhara Sumie (Mezzo-Soprano)

京都市立芸術大学大学院修了。音楽学部賞受賞。黛敏郎『古事記』イザナミ、『カルメン』表題役、『アイーダ』アムネリス、『ばらの騎士』オクタヴィアン、『ナクソス島のアリアドネ』作曲家、ヒンデミット『聖スザンナ』クレメンツィア、『修道女アンジェリカ』公爵夫人など。モーツァルト『レクイエム』、バッハ『ヨハネ受難曲』、マーラー『交響曲第2番 復活』、ヴェルディ『レクイエム』、ブラームス『アルト・ラプソディ』、プロコフィエフ『アレクサンドル・ネフスキー』、バーンスタイン『交響曲第1番 エレミア』など、オーケストラとの共演も多数。平成25年度神戸市文化奨励賞、2015年度音楽クリティック・クラブ賞受賞。武庫川女子大学音楽学部教授。ほか京都市立芸術大学でも後進の指導にあたる。

中井亮一（テノール）
Nakai Ryoichi (Tenor)

名古屋芸術大学声楽科首席卒業、同大学院修了。スカラ座音楽院オペラ研修所修了。留学中、スカラ座をはじめフェニーチェ歌劇場、Rossini Opera Festivalなどイタリア各地でオペラや演奏会に出演。帰国後は藤原歌劇団の主役級テノールとして『セビリアの理髪師』、『夢遊病の女』、『椿姫』、『ホフマン物語』、『夕鶴』などのオペラや、『メサイア』『第九』など各種コンサートで活躍中。本年２月には新国立劇場本公演『愛の妙薬』ネモリーノ役で外国人キャストの代役として急遽主演デビューし大きな成功を収めた。桜美林大学講師。藤原歌劇団団員。

駒田敏章（バリトン）
Komada Toshiaki (Baritone)

愛知教育大学を経て、東京藝術大学大学院修了。新国立劇場オペラ研修所11期としてオペラを学ぶ。修了後、文化庁海外派遣制度でベルリンに留学。オランダ・フローニンゲンで開催された音楽祭でラヴェル『スペインの時』ラミーロ役で出演、音楽祭のファイナルコンサートに声楽代表として出演した。帰国後は小澤征爾音楽塾、セイジ・オザワ松本フェスティバル、新国立劇場などに出演。オペラ出演と共に歌曲の演奏に力を入れており、東京・春・音楽祭や東京オペラシティ文化財団主催『B→C』に出演した。第83回日本音楽コンクール第1位。

黒田亜樹（ピアノ）
Kuroda Aki (Piano)

東京藝術大学卒業、伊ペスカーラ音楽院高等課程を最高位修了。フランス音楽コンクール第1位。ジローナ20世紀音楽コンクール現代作品特別賞。現代音楽演奏コンクール優勝、朝日現代音楽賞。ビクター『タンゴ2000』『タルカス＆展覧会の絵』、伊LIMENレーベル『プルグミュラーエチュード全曲集』など録音多数。サルデーニャのSpazio Musica現代音楽祭、シチリアのエトネ音楽祭などイタリアを中心に活動、作曲家の指名により録音した『Piano Collections FINAL FANTASY』などでも知られる。2014年『火の鳥〜20世紀ピアノ編曲集』を伊オドラデクよりリリース、英BBCミュージックマガジンにて五つ星、レコード芸術誌にて特選盤。東京現音計画メンバー。

矢野雄太（ピアノ）
Yano Yuta (Piano)

東京藝術大学ピアノ科卒業後、同大学大学院修士課程修了。その後渡伊、ミラノ・スカラ座研修所コレペティトゥアコース、ミラノ市立クラウディオ・アッバード音楽院指揮科修了。第23回リナサラガッロ国際ピアノコンクール、バッハ特別賞、第13回アントニオ・ナポリターノ国際ピアノコンクール第1位、第1回クライスレリアーナ国際ピアノコンクール第1位をはじめ、国内外のコンクールで優勝、入賞多数。2015年NPO法人芸術・文化若い芽を育てる会奨励賞受賞。また、ミラノ・スカラ座『はじめに音楽、次に言葉』、『ジャンニスキッキ』、『リゴレット』、子供のための『チェネレントラ』、上海・上音オペラハウス『魔笛』などで、アシスタントを務める。

有馬純寿（音響）
Arima Sumihisa (Sound)

1965年生まれ。エレクトロニクスやコンピュータを用いた音響表現を中心に、現代音楽、即興演奏などジャンルを横断する活動を展開。これまでに数多くの演奏会で電子音響の演奏や音響技術を手がけ高い評価を得ている。第63回芸術選奨文部科学大臣新人賞芸術振興部門受賞のほか、秋吉台国際芸術村『ペルセポリス』ソリスト、東京シンフォニエッタ、東京現音計画のメンバーとして、サントリー芸術財団佐治敬三賞受賞。国内外の実験的音楽家とのセッションや、美術家とのコラボレーションも多い。帝塚山学院大学リベラルアーツ学科准教授、東京音楽大学大学院特任教授、京都市立芸術大学非常勤講師。

中山奈美（照明）
Nakayama Nami (Lighting)

米国で演劇にふれたことをきっかけに1991年に劇団文学座付属演劇研究所に入所、舞台照明を始める。1998-99年文化庁在外研修員として、ニューヨークで研修。1997年から2005年まで、北京の生活舞踏工作室に参加、欧米ツアーへ同行。2017年よりフリーランスとなり、演劇・ダンス・インスタレーションなどの照明プランナーとして活動している。最近の参加作品に スペースノットブランク『ささやかなさ』、FUKAI PRODUCE羽衣『New甘え子ちゃん太郎』、野上絹代演出『カノン』、松之木天辺 ひとり大衆演劇『贋作 お島千太郎&歌謡ショー』など。

蓄音器オペレーター Phonograph Operator

小田美沙紀 Oda Misaki

クラリネット奏者。愛知県立芸術大学卒業。クラリネットを小川秀樹・三浦慈子・黒岩義臣の各氏に師事。広島プロミシングコンサート2007に選出され、広島交響楽団と共演。第12回大阪国際音楽コンクール管楽器部門木管Age-Gエスポアール賞。愛知室内オーケストラ、アイリス クラリネット カルテット、日本ウインドアンサンブル《桃太郎バンド》、CHIZ各メンバー。ドルチェミュージックアカデミー講師。

野口桃江 Noguchi Momoko

システムの数理的美しさ、共感覚などをテーマに持ち、器楽〜電子音響作品の作曲、生体情報を扱ったピアノ即興演奏、インスタレーションの作成、EVをアート化する協働プロジェクトなどの創作活動を日欧各地で行うほか、ワークショップをとおして多様な人々と関わることをライフワークとしている。桐朋学園大学音楽学部作曲理論学科卒業。蘭デン・ハーグ王立音楽院ArtScience学科修士課程修了。

原綾美 Hara Ayami

名古屋芸術大学大学院声楽専攻修了。第９回東京国際声楽コンクールオペレッタ部門第３位（最高位）。第４回ウィーンオペレッタコンクールプロフェッショナル部門入選。『フィガロの結婚』スザンナ役、『ホフマン物語』オランピア役、『白馬亭にて』クレールヒェン役、『不思議の国のアリス』けしの花１役、『メリー・ウィドウ』ヴァランシェンヌ役等出演。また、『いのち』コンテンポラリーダンサーで出演。

東山佳永 Touyama Kae

フリーランスのダンサーとして舞台や映像、紙面、美術作品に携わる。2008年より作家活動を開始。踊りや言葉と空間を使ったパフォーマンス作品と、インスタレーションや環境とコミュニケーションを使った対話型の現代美術作品を制作。都内美術館、あいちトリエンナーレ2013等に出品。近年はアーティストとして教育普及に尽力し多数のWSを開催。東京都庭園美術館での『透明になるためのプラクティス』など。

林亮太 Hayashi Ryota

2000年生まれ、愛知県瀬戸市出身。名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科に在学中。サンプリングを用いた作曲、SNS、音楽配信時代の音楽メディア論について勉強中。

藤島えり子 Fujishima Eriko

福岡県出身。愛知県立芸術大学美術学部油画専攻卒業。名古屋の演劇チームroom16所属。役者・宣伝美術などを担当。団体は現在休止中。2015年より長久手市文化の家情報系創造スタッフとして５年間活動。広報補助やフリースペースでの演劇公演などを企画。近年はツアー公演や愛知県外での公演にも出演する他、美術の経験を活かし対話型鑑賞のファシリテーターを行なったりと活動の幅を広げている。

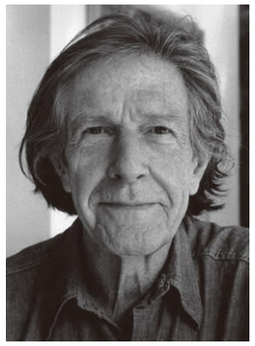

Photo: Christopher Felver

ジョン・ケージ

1912年ロサンゼルス（米国）生まれ
ニューヨーク（米国）を拠点に活動／1992年没

20世紀を代表する作曲家、詩人、思想家、キノコ研究家。マース・カニングハムら舞踊家、マックス・エルンストら美術家、バックミンスター・フラーら思想家、建築家とも深い交流があった。1940年代に禅を学び東洋思想への関心を深める。作曲過程に中国の易経を用いる「チャンス・オペレーション」を開発、演奏や聴取の過程に偶然性が関与する不確定性の音楽を開拓し、作曲家が音のコントロールを行わない、偶然性の音楽を確立した。またグランドピアノの弦にゴム、ボルトなどを挟んで音色を打楽器的なものに変化させる「プリペアド・ピアノ」を考案した。晩年に取り組んだ『ユーロペラ』シリーズは、オペラ歌手の歌、ピアノ、蓄音機、音響、照明などの要素が、コンピューターから出力された乱数に沿って演奏される、大規模な演劇的作品の代表作。

John Cage

Born 1912 in Los Angeles, USA.
Based in New York, USA; died in 1992 in New York, USA

John Cage was one of the most influential composers, poets, thinkers and mycologists of the 20th century. He maintained deep relationships with dancers like Merce Cunningham, artists like Max Ernst, and architects and philosophers like Buckminster Fuller. In the 1940s, Cage deepened his interest in Eastern Philosophy and began studying Zen Buddhism. He developed the method of chance operations by utilizing motifs from the Chinese I Ching in the compositional process, pioneered “music of indeterminacy,” which introduces chance to the acts of performing and listening, and developed chance music, where the composer gives up control over the sound. Cage is also the inventor of the prepared piano: by placing rubber bolts between the strings of a grand piano, Cage manipulated its tone to resemble percussion instruments. The *Europera* series, created in Cage’s final years, is one of the artist’s masterpieces created through chance operations, with the elements of the opera (songs, piano, gramophones, sound, lighting etc.) determined by randomly-generated directions.

主な作品発表・受賞歴

1994-1995（没後）「ローリーホーリーオーバー・サーカス」水戸芸術館、茨城
1989　京都賞（思想・芸術部門）受賞、京都
1987　『ユーロペラ1&2』フランクフルト歌劇場委嘱初演、ドイツ
1952　『4分33秒』マーベリック・コンサートホール、ウッドストック、ニューヨーク（米国）

Selected Works & Awards

1994-1995　*Rolywholyover: A Circus for Museum* (posthumously), Art Tower Mito, Ibaraki, Japan
1989　Kyoto Prize in Arts and Philosophy, Kyoto, Japan
1987　*Europeras 1 & 2*, Commissioned premiere at Frankfurt Opera House, Germany
1952　*4’33”*, Maverick Concert Hall, Woodstock, New York, USA

作曲：ジョン・ケージ
演出：足立智美
出演：佐野登（能楽師シテ方）
松田若子（能楽師シテ方）
西本真子（ソプラノ）
福原寿美枝（メゾ・ソプラノ）
中井亮一（テノール）
駒田敏章（バリトン）
黒田亜樹（ピアノ）
矢野雄太（ピアノ）
有馬純寿（音響）
中山奈美（照明）
足立智美（蓄音器、ユーロペラ4のみ）

小田美沙紀（蓄音器）
東山佳永（蓄音器）
野口桃江（蓄音器）
林亮太（蓄音器）
原綾美（蓄音器）
藤島えり子（蓄音器）

制作：福永綾子（ナヤ・コレクティブ）

舞台監督：尾﨑聡
衣裳：株式会社エフ・ジー・ジー
ヘアメイク：小木曽浩美

記録映像：株式会社青空
記録写真：今井隆之

パフォーミングアーツ・アドバイザー：藤井明子（国際芸術祭「あいち2022」）
制作：村松里実（国際芸術祭「あいち2022」）

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
共催：愛知県芸術劇場
協力：ジャパン・ソサエティー（ニューヨーク）

蓄音器、SPレコード提供：金沢蓄音器館
蓄音器アドヴァイザー：八日市屋典之、浅井百生、森雅史

文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

Composition: John Cage
Direction: Adachi Tomomi
Performers: Sano Noboru (Noh performer)
Matsuda Wakako (Noh performer)
Nishimoto Mako (Soprano)
Fukuhara Sumie (Mezzo-Soprano)
Nakai Ryoichi (Tenor)
Komada Toshiaki (Baritone)
Kuroda Aki (Piano)
Yano Yuta (Piano)
Arima Sumihisa (Sound)
Nakayama Nami (Lighting)
Adachi Tomomi (Phonograph in Europera 4)

Oda Misaki (Phonograph)
Touyama Kae (Phonograph)
Noguchi Momoko (Phonograph)
Hayashi Ryota (Phonograph)
Hara Ayami (Phonograph)
Fujishima Eriko (Phonograph)

Production Manager: Fukunaga Ayako (naya collective)

Stage Manager: Ozaki So
Costumes: F.G.G.CO.,LTD
Hair Make: Ogiso Hiromi

Video Documentation: AOZORA, LTD.
Photography: Imai Takayuki

Performing Arts Adviser: Fujii Akiko (Aichi Triennale 2022)
Production Coordinator: Muramatsu Satomi (Aichi Triennale 2022)

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co-Presented by Aichi Prefectural Art Theater
In Co-operation with Japan Society (New York)

Phonograph & SP Records: courtesy of Kanazawa Phonograph Museum
Phonograph advisers: Yokaichiya Noriyuki, Asai Momoo, Mori Masashi

STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

国際芸術祭「あいち2022」パフォーミングアーツ

アドバイザー：藤井明子、前田圭蔵
キュレーター：相馬千秋

プロダクションマネージャー：清水翼
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田遥、菅井一輝

テクニカル・コーディネーター：尾﨑聡

票券：小森あや（bench Co.）

翻訳：ロバート・ツェツシェ
編集：鈴木理映子
デザイン：山口良太

AICHI TRIENNALE 2022 Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo
Curator: Soma Chiaki

Production Manager: Shimizu Tsubasa
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko
Shibata Haruka, Sugai Kazuki
Technical Coordinator: Ozaki So

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

Translation: Robert Zetzsche
Editor: Suzuki Rieko
Designer: Yamaguchi Ryota

PAチャンネル
詳しくはこちら
各作品の背景についてのレクチャー、参加アーティストによるトークなど、パフォーミングアーツ・プログラムを多面的に体験するためのオンライン・コンテンツです。

2022年7月30日|土|— 10月10日|月・祝|[73日間]
芸術監督：片岡 真実（森美術館館長、国際美術館会議（CIMAM）会長）
主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
助成：一般財団法人地域創造
愛知県政150周年記念事業

AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE
July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022
Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)
Organized by Aichi Triennale Organizing Committee
Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities